OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	退職記念号の刊行にあたって
Author(s)	
Citation	日本語・日本文化. 2012, 38, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/21935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

退職記念号の刊行にあたって

本号は、今年度をもって定年を迎えられる奥西峻介教授の退職記念号である。

退職記念号を編むことは、『日本語・日本文化』にとって異例に属する。

最初期には何度かそのようなこともあったが、伝統としては存在しない。

退職される方は当然これまで幾たりもあったが、ことごとく記念号のようなものは辞退された、と仄聞している。その余の事情については、詳しく知らない。

奥西先生に記念号について最初にお話ししたときも、辞退される由のお返事であった。しかし我々はそれでよしとしなかった。失礼ながら、これは奥西先生のためにするのではない。我々自身のために、するのである。もしも先生のご退職にあたって、何か形に残る記念を残せないならば、必ずや後悔するに違いない、だから気の済むようにさせていただきたい。そのように申し上げた。それでもなかなか首を縦にふっては下さらなかったが、最後にはご承諾下さった。

我々がそこまでこだわったのは、言うまでもなく、多年にわたる奥西先生の多大なるご尽力に感謝するが故であった。今ここでそれをくだくだしく説明することは避ける。ただ一つだけ記しておきたいのは、奥西先生のお力なくしては、現在の日本語日本文化教育センターは存在しなかった、ということである。少なくとも現在のような形は望むべくもなかったということである。その感謝を表すには、やはり研究結果をもってするに如くはないのではないか。それが我々の一致した考えであった。そして研究を以てこととする者が、記念に残せるものとして、その研究の成果以上のものがあろうはずもない。それ故に敢えて、異例となる記念号を編むことになったのであった。

本記念号にはまた、奥西先生の業績一覧を掲げた。その鴻学ぶりには圧倒されるばかりであるが、それでもまだ、先生の博覧強記のごく一端を示すに過ぎない。そのことは、日々先生とお話しさせていただく者たちがよく存じ上げているとこ

ろである。ご退職は規則の定めるところに過ぎず、先生のご健康とは何の関係もない。先生は心身ともにいよいよご壮健であられる。今後もご自身の研究を進められ、後進に学究の範を示して下さることと信ずる。ことわざに、百川海に学びて海に至るという。本記念号は、先生がそのような我々にとっての目標としていられることを示し、いささか惜別のしるしとするものである。

平成二十四年二月十一日

『日本語・日本文化』編集委員会